

西からやって来た氷期の狩人

ー南関東における瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器ー

（公財）かながわ考古学財団

※所属（公財）大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

絹川 一徳

はじめに

1. 旧石器時代とは？
2. 最終氷期の自然環境と日本列島の旧石器文化
3. 相模野台地における後期旧石器時代後半期の石器群について
4. 瀬戸内技法とサヌカイトー国府型ナイフ形石器の出現
5. 近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群の変遷と特徴
6. 東へ向かった氷期の狩人ー瀬戸内技法と国府系ナイフ形石器の東日本への展開
7. 狩人たちの東西交流ー南関東における国府系ナイフ形石器の位置づけ

まとめ

1. 旧石器時代とは？

後期旧石器時代のはじまり 旧石器時代は人類の歴史のなかで最も古く長い時代です。サルからヒトへと進化を遂げる過程でヒトは最初に道具を用いるようになりましたが、その一つが石器です。人類は、今からおよそ 250 万年前に日常的に用いるために石器を製作するようになりました。最初は自然の礫石の一部を打ち欠いて刃付けをした単純な石器だったのですが、やがて石を割って細かい加工を施し、より複雑で整ったかたちの石器を作るようになりました。それに伴って同じような石片を剥がして必要な道具に加工する石器製作技術も発達しました。そして 5 万年前になると、石刃技法という 1 つの石核から同じかたちの剥片である石刃を連続的に生産する極めて高度な石器製作技術を発明するに至ったのでした。こうした人類史上の石器製作技術の進歩をもとに、250 万～20 万年前を前期旧石器時代、20 万～5 万年前を中期旧石器時代、5 万～1 万 2000 年前を後期旧石器時代として区分しています。現在のところ、日本列島に所在する旧石器時代遺跡のほとんどは後期旧石器時代に属します。ただし、4 万年前をさかのぼる石器群の存在について出土例はあるものの、懐疑的な研究者も少なくないのが現状です。

2. 最終氷期の自然環境と日本列島の旧石器文化

最終氷期の自然環境 後期旧石器時代は現在よりも寒冷な気候で、世界的に氷河が発達した時代でした。旧石器時代の氷期は、ヨーロッパ・アルプス北部の氷河性堆積物の消長を標準として 5 時期が知られています。古いほうからドナウ氷期、ギュンツ氷期、ミンデル氷期、リス氷期、ヴェルム氷期で、寒冷で氷床が発達した氷期と温暖な間氷期が繰り返されました。最終氷期（約 7～1 万年前）であるヴェルム氷期で最も寒冷だった時期（LGM：2 万 7,000～2 万年前）は、地球上の平均気温は現在より 5～10℃も低かったようです（図 1・2）。このため海水面は最大で現在よりも 120m ほど低下しました。関東地方では標高 1,000～1,800m の高原に相当する気候と環境下にあり、瀬戸内海や大阪湾は完全に陸化し内陸の盆地が形成され、海底下の平坦地は大部分が草原となったようです（図 2）。

日本列島における最終氷期の動物群は、大きく2つのグループに分けることができます(図3)。ナウマンゾウを伴う動物群とマンモスゾウを伴う動物群です。後者は北海道など東北日本の北半を中心に生息した動物群で、マンモスゾウのほかにヘラジカ、バイソン、オーロクス、ウマなどが認められます。ナウマンゾウを伴う動物群には、オオツノジカ、ニホンムカシジカ、ニホンジカ、ヒグマ、テン、アナグマ、タヌキ、ニホンザル、オオカミ、キツネなどがいました。主体となる動物からナウマンゾウ・オオツノジカ動物群とも呼ばれています。長野県の野尻湖畔では、ナウマンゾウの化石とともに石器や骨角器などが出土しており、立が鼻遺跡はナウマンゾウなどの大型哺乳動物を解体したキルサイトと考えられています。最終氷期最寒冷期の前半にはナウマンゾウの一部やオオツノジカが生息していたことから、旧石器人はこれらの大型哺乳動物を狩猟対象としていたとみられます。

日本列島の旧石器文化 後期旧石器時代前半期の前段階は台形様石器と刃部磨製石斧に特徴づけられる石器群で、同じ特徴をもつ石器群が日本列島に広く分布します(図4・6)。この段階の石器群は技術や石器形態に斉一性があり、地域性はそれほど顕著ではありません。前半期の後段階には日本列島各地で狩猟具としてナイフ形石器が盛行・発達します。その素材には縦長で細長い短冊状の形をした石刃とよばれる剥片が用いられるようになり、石刃を量産する石刃技法という技術も日本列島の各地で認められるようになります。

後期旧石器時代後半期になるとナイフ形石器は狩猟具の主体となり、各地で盛んに作られるようになります。地域によって使用される石材や石器の形態が異なり、それぞれの地域性も顕著となりました。近畿・瀬戸内地方では横剥ぎ技術によるナイフ形石器が盛行しますが、特に瀬戸内技法というナイフ形石器製作のための特徴的な石器製作技術が認められるようになります(図5)。

3. 相模野台地における後期旧石器時代後半期の石器群について

厚いローム層と異なる地層から出土する石器群 相模野台地は、厚いローム層からいくつもの異なる地層から石器群が出土しており、層的に検討することで詳細な石器群の変遷を復元することができます(図7・8)。相模野第Ⅰ期(段階Ⅰ～Ⅱ)は台形様石器と刃部磨製石斧に代表される石器群、第Ⅱ期(段階Ⅱ～Ⅳ)は石刃技法とナイフ形石器の石器群で、その出現と展開段階と位置づけることができます。続く第Ⅲ期(段階Ⅴ)が近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群の影響が指摘される時期です。この時期の石器群には、横剥ぎ素材のナイフ形石器をはじめ多様なかたちのナイフ形石器や西日本でも主要器種である角錐状石器、円形搔器などが認められます。石器製作のための剥片剥離技術も多様性がみられ、石器群の地域性が顕著となった段階といえます。続く第Ⅳ期は尖頭器、第Ⅴ期は細石刃石器群の出現と展開段階として評価されています。

4. 瀬戸内技法とサヌカイトー国府型ナイフ形石器の出現

サヌカイトについて サヌカイトは1,500～1,300万年前に生成された瀬戸内火山岩類のひとつで、無斑晶質でマグネシウムを豊富に含むガラス質石基の古銅輝石安山岩と定義されています。標式となる産出地は香川県五色台・城山一帯で、奈良県二上山や佐賀県鬼ノ鼻山など中央構造線の北側の瀬戸内海に沿った地域に同類・近縁の火山岩が分布しています。本来、サヌカイトの名称は香川産のものに限定して、それ以外はサヌキトイドと呼ぶ研究者もいますが、考古学的には二上山産のものも含めて慣例的にサヌカイトと呼んでいます。サヌカイトの新鮮面は黒色緻密でピロードのような光沢をもち、ガラス質です。また、マグマの流動が縞状の流理構造をなすことから、平たく割れやすいという特徴があります。

横剥ぎ技術としての瀬戸内技法 瀬戸内技法は、大阪府藤井寺市国府遺跡から出土した横長剥片剥離技術(「横剥ぎ技術」と呼びます)による(国府型)ナイフ形石器の製作方法を検討した鎌木義昌によって提唱された石器製作技術です(鎌木1960)。その後、松藤和人がサヌカイト原産地である奈良県二上山北麓で採集された旧石器資料をもとに再検討を行い、鎌木が当初に示した工程を修正して、原礫の剥離から国府型ナイフ形石器の製作に至

る連続的な工程をもつ規則的な技術として瀬戸内技法を復元しました（松藤 1974・1979）。原礫から交互剥離により盤状剥片を連続的に剥離する第1工程、石核に山形の打面縁調整を施して翼状剥片を連続剥離する第2工程、翼状剥片から国府型ナイフ形石器を製作する第3工程が連続的に行われることで、効率的にナイフ形石器を量産することができます（図5）。瀬戸内技法は、香川県国分台遺跡や佐賀県東分遺跡などの二上山以外のサヌカイト原産地においても認めることができます。

5. 近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群の変遷と特徴

瀬戸内技法の成立と展開 後期旧石器時代前半期のうち後段階になると、近畿・瀬戸内地方ではサヌカイト製の板状の大型剥片を石核とした横剥ぎ技術によって有底横長剥片（石核の平たい底面を縁辺に取込んだ剥片）を素材とするナイフ形石器が出現します（図10：Ⅱ期：25・26）。この時期には典型的な瀬戸内技法は成立していませんが、部分的に瀬戸内技法と同じような横剥ぎ技術によって、かたちが国府型と類似する一側縁加工のナイフ形石器が作られるようになります。ただし、後に盛行する瀬戸内技法のように大型ナイフ形石器を集中製作するような状況は認められません。むしろ、同じ石核から形態が異なるナイフ形石器が作られることもあり、瀬戸内技法のような原礫の分割から完成品に至る石器製作技術としての工程の連続性と一貫性はみられません。

近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群が周辺地域への拡散する第1段階は、瀬戸内技法が出現する以前で、技術的には一部が瀬戸内技法と共通するものの、多様な横剥ぎ技術によって製作されたナイフ形石器を主体とする石器群が展開する段階（図10：Ⅱ～Ⅲ期への移行段階）といえます。

後期旧石器時代後半期になると、九州地方から流入した角錐状石器（図10：31～34）が新たに近畿地方でも認められるようになります（図10：Ⅲ期）。この段階に国府型ナイフ形石器は角錐状石器と同様に大型化が進行しました。こうした国府型ナイフ形石器の大型化が、第1～3工程で構成される典型的な瀬戸内技法の成立につながったと考えられます。可能性として、大型獣を対象とする狩猟活動への新たな適応などに起因して、石槍としての大形ナイフ形石器の需要（森先 2010）が高まり、石材が豊富な二上山北麓のサヌカイト原産地遺跡を中心に大形ナイフ形石器の集中製作が繰り返し実施されたと考えられます。その結果、原礫分割からナイフ形石器製作までの3つの工程を連結させた瀬戸内技法が成立したと推定されるのです。この完成した瀬戸内技法の周辺への広がりを第2段階（図10：第Ⅲ期の前半段階）とみなすことができます。

6. 東へ向かった氷期の狩人—瀬戸内技法と国府系ナイフ形石器の東日本への展開

日本海沿岸域の瀬戸内技法 瀬戸内技法は、西は九州地方、東は東北地方南部までその広がりを認めることができます（図12）。東日本への近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群と瀬戸内技法の展開は、日本海側と太平洋側の2つのルートを考えることができます。石器の製作技術や石器群全体の類似性は日本海側の遺跡群において確認することができます。一方の太平洋側は、石器製作に対する横剥ぎ技術の影響は認めることができますが、瀬戸内技法そのものの存在は希薄といえます（図19・20）。東日本において瀬戸内技法第1～3工程の各工程資料がセットで出土した遺跡には、岐阜県日野遺跡（図18）、新潟県御淵上遺跡（図16）、群馬県上白井西伊熊遺跡（図17）、山形県越中山遺跡K地点（図16）があります。

日本海沿岸域の瀬戸内系横剥ぎ石器群の変遷 長野県野尻湖遺跡群では始良 Tn 火山灰（AT）の降灰前に瀬戸内系横剥ぎ石器群が存在するという見解がありますが、出土層準については議論があります。それ以外の瀬戸内系横剥ぎ石器群や国府系ナイフ形石器はAT火山灰の降灰以降に認められます。石器群は次の3群に分かれます。

1群は国府型ナイフ形石器のほか、翼状剥片、同石核、盤状剥片、同石核など瀬戸内技法1～3工程の関連資料がセットで認められる石器群で、前述の御淵上や越中山遺跡K地点などが該当します。そのほか新潟県加用中条A（図21：26・27）、芋ノ原（図21：30）、正面ヶ原B遺跡（図21：29）では横剥ぎナイフ形石器の製作が行われ、国府型

ナイフ形石器の中には大形品が認められ、御淵上遺跡以外では角錐状石器も相伴しています。安山岩などのサヌカイトに類似した石材が用いられたものが多いのも特徴です。2群は国府型を含む横剥ぎナイフ形石器は存在するものの、遺跡内において瀬戸内技法関連資料が認められません。切出形含む多様な形態の縦長剥片素材のナイフ形石器や角錐状石器、彫器、搔器、石錐、尖頭器、石刃等が相伴します。新潟県樽口 A-KSE 文化層（図 21：20～23）、坂ノ沢 C（図 21：24・25）、大聖寺（図 21：28）、二タ子沢 B 遺跡、長野県東裏、福井県西下向遺跡（図 21：32）などがあります。3群は有底横長剥片の打面部を背面側から整形加工した直坂Ⅱ型ナイフ形石器（麻柄 1984）を組成する石器群で、おもに北陸地方西半に分布します。富山県直坂Ⅱ（図 21：33・34）、新造池 A、長野県貫ノ木 H1Ⅱ文化層（図 21：35）、西岡 A 遺跡、新潟県大堀遺跡（図 21：31）などがあります。

7. 狩人たちの東西交流—南関東における国府系ナイフ形石器の位置づけ

南関東の横剥ぎ石器群 南関東では立川ローム層の第Ⅳ層下部の層準において横剥ぎ石器群が出土したことから、この時期に近畿・瀬戸内地方の影響を受けた横剥ぎ石器群が関東地方で顕在化すると理解されるようになりました。1980年代に埼玉県殿山遺跡や神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡で国府型ナイフ形石器が出土すると、瀬戸内系横剥ぎ石器群と関東地方以西に広く分布する角錐状石器との関係も注目されるようになりました。特に南関東では、国府型ナイフ形石器以外の瀬戸内技法関連資料が認められないという状況が地域的な特徴として注目されていました。しかし、2004年に発掘調査された群馬県上白井西伊熊遺跡において関東地方で初めて瀬戸内技法関連資料がセットで出土したことから、その系統や編年の位置づけについて新たな議論が起こっています。

南関東の横剥ぎ石器群の変遷 相模Ⅲ期・段階Ⅴ（図 7・8：B2L～B2U 層）、武蔵野編年Ⅲ期（図 9：第Ⅴ・Ⅳ層下部段階）の石器群は、横長・短形剥片素材の切出形ナイフ形石器や縦長剥片素材の基部加工のナイフ形石器など、多様な形態のナイフ形石器に角錐状石器や円形搔器がみられます。しかし、柏ヶ谷長ヲサ第Ⅸ文化層、殿山、提灯木山遺跡第Ⅲ文化層では国府型ナイフ形石器が出土するものの、それ以外の瀬戸内技法関連資料や瀬戸内技法に類似する明確な有底横長剥片の剥離技術の存在は指摘できません。横剥ぎに関連する石器群を以下の3群に分類しておきます。

1群として神奈川県柏ヶ谷長ヲサ第Ⅹ・Ⅸ文化層（図 21：14・15）、上草柳第2地点第Ⅱ文化層、上土棚第Ⅴ文化層、東京都はけうえ第Ⅴ層文化、鈴木 D 地点、武蔵台東第Ⅴ中文化層、埼玉県殿山（図 21：1～4）、提灯木山第Ⅲ・Ⅳ文化層、中原後、群馬県峯山第1文化層、栃木県寺野東遺跡 A 地点第Ⅱ文化層（図 21：18・19）などがあり、角錐状石器に厚手の横長剥片を素材とした大形品があり、刃部幅が狭い切出形ナイフ形石器が伴っています。2群には、神奈川県上土棚第Ⅲ・Ⅳ文化層（図 8：10～13）、橋本第Ⅳ文化層、東京都鈴木第Ⅳ層下部（図 8：16）、前原第Ⅳ層下部、多聞寺前第Ⅳ層下部、自由学園南第2文化層、比丘尼橋 B 第Ⅳ層、丸山東第Ⅳ文化層、坂下、埼玉県天沼（図 21：5・6）、提灯木山遺跡第Ⅱ文化層（図 21：7）、泉水山、中砂（図 21：8・9）、上ノ台、和田北、松木、谷津下Ⅰ、赤山、群馬県岩宿第Ⅱ文化層などがあり、角錐状石器と切出形石器、横剥ぎナイフ形石器のいずれも小形品が多くなります。そのほか、3群として、小形の角錐状石器や涙滴形のナイフ形石器が伴う石器群があります。神奈川県下九沢山谷遺跡と県営高座渋谷団地遺跡では両面体石器が出土しており、槍先形尖頭器が伴う可能性があります。

群馬県上白井西伊熊遺跡でも、国府型ナイフ形石器とともに涙滴形のナイフ形石器と槌状剥離を有する尖頭器が瀬戸内技法に伴伴しています。南関東の国府型ナイフ形石器は柏ヶ谷長ヲサ第Ⅸ文化層や殿山遺跡例にみられるように当該時期のより古い段階に位置づけられてきたが、上白井西伊熊遺跡の相伴例を考慮するなら、瀬戸内系横剥ぎ石器群の関東地方への流入や影響は、直接・間接的な集団の接触違いや一定の時間幅を考慮する必要があるようです。

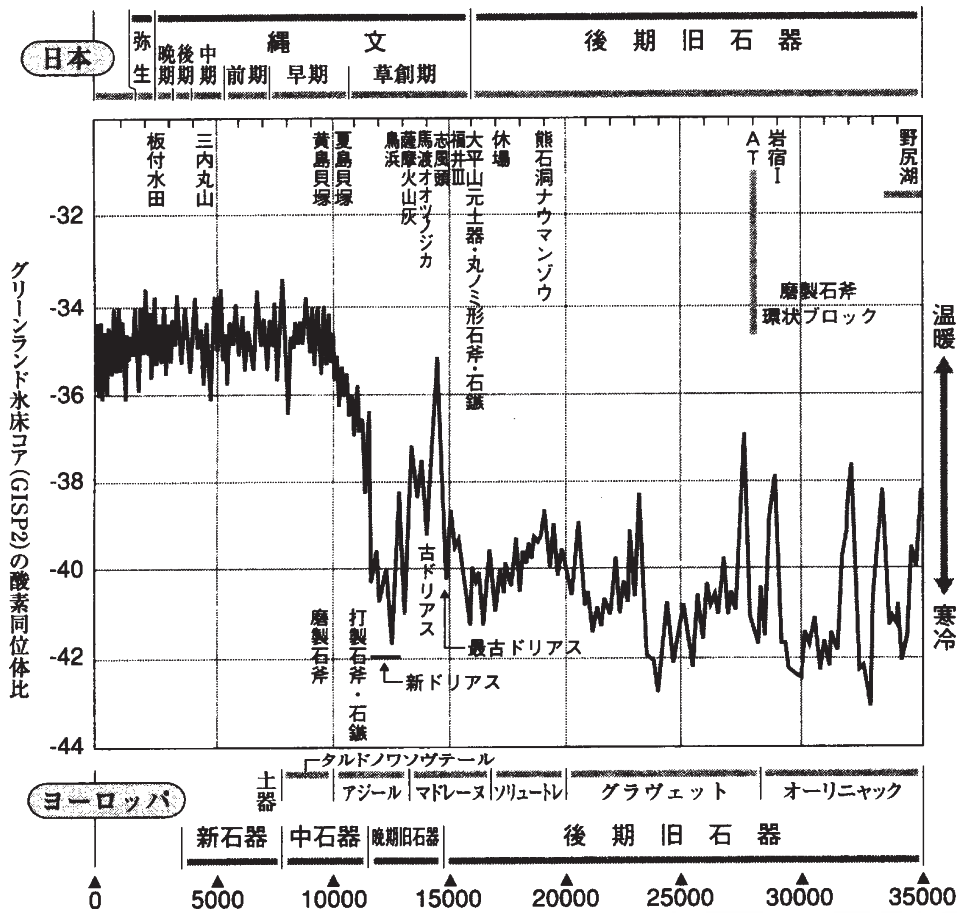


図1 グリーン・ランド氷床コアの酸素同位体が示す気候変動 (白石 2002)



1. 氷河および高山の裸地、草地 (ハイマツ帯を除く高山帯に相当する地域)
2. ハイマツ群落および亜寒帯性の疎林
3. グイマツをともなう亜寒帯針葉樹林
4. グイマツをともなわない亜寒帯針葉樹林 (中部地方および近畿地方では一部にカラマツをともなう)
5. 冷温帯針広混森林 (ブナをともなう)
6. ブナをほとんどともなわない冷温帯針広混森林
7. 暖温帯常緑広葉樹林 (照葉樹林)
8. 土地がいちじるしく乾燥し、草地が発達した地域
9. 現在の海岸線 (点線)
10. 最終氷期最寒冷期の海岸線 (実線)

図2 後期旧石器時代の古植生図 (那須孝梯による復元)

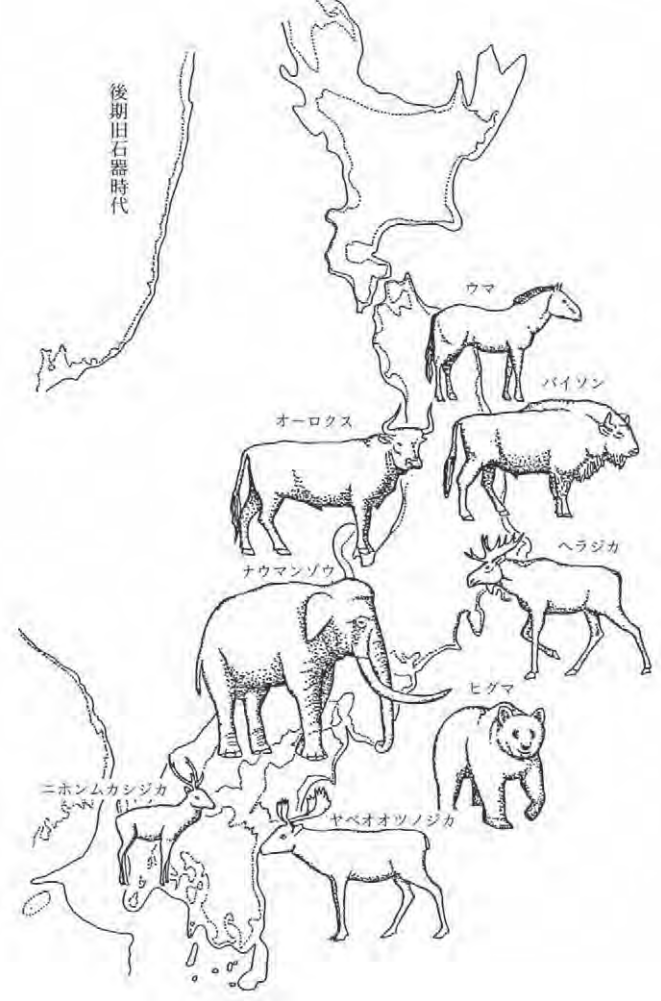
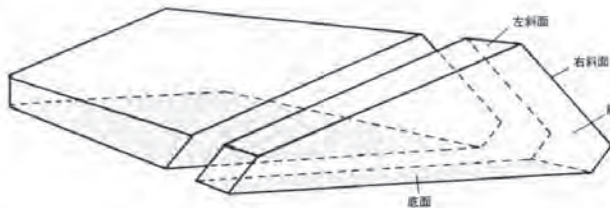
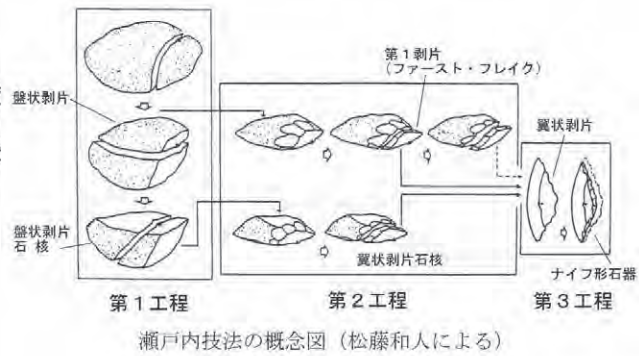


図3 後期旧石器時代の動物群 (福田編 1988)



- ・すべての面は、側面でもボジ面でもネガ面でもよい。また、素材面でも作出面でもよい。
- ・底面は1面構成でなければならない。その他の面は何面構成でも構わない。
- ・打撃は斜面上のどこに与えられてもよい。

瀬戸内概念 (高橋章司による)

図5 瀬戸内技法と瀬戸内概念

図4 後期旧石器時代の遺跡分布 (小菅 2006)



図6 日本列島における後期旧石器時代石器群の変遷 (小菅 2006)

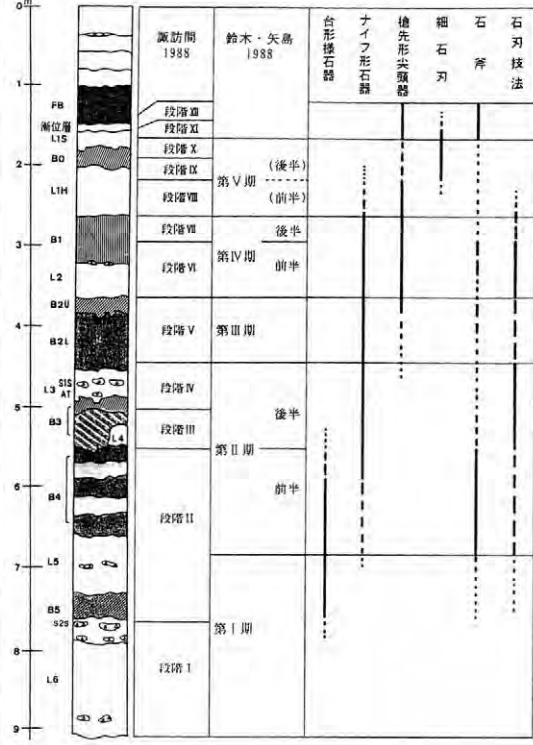
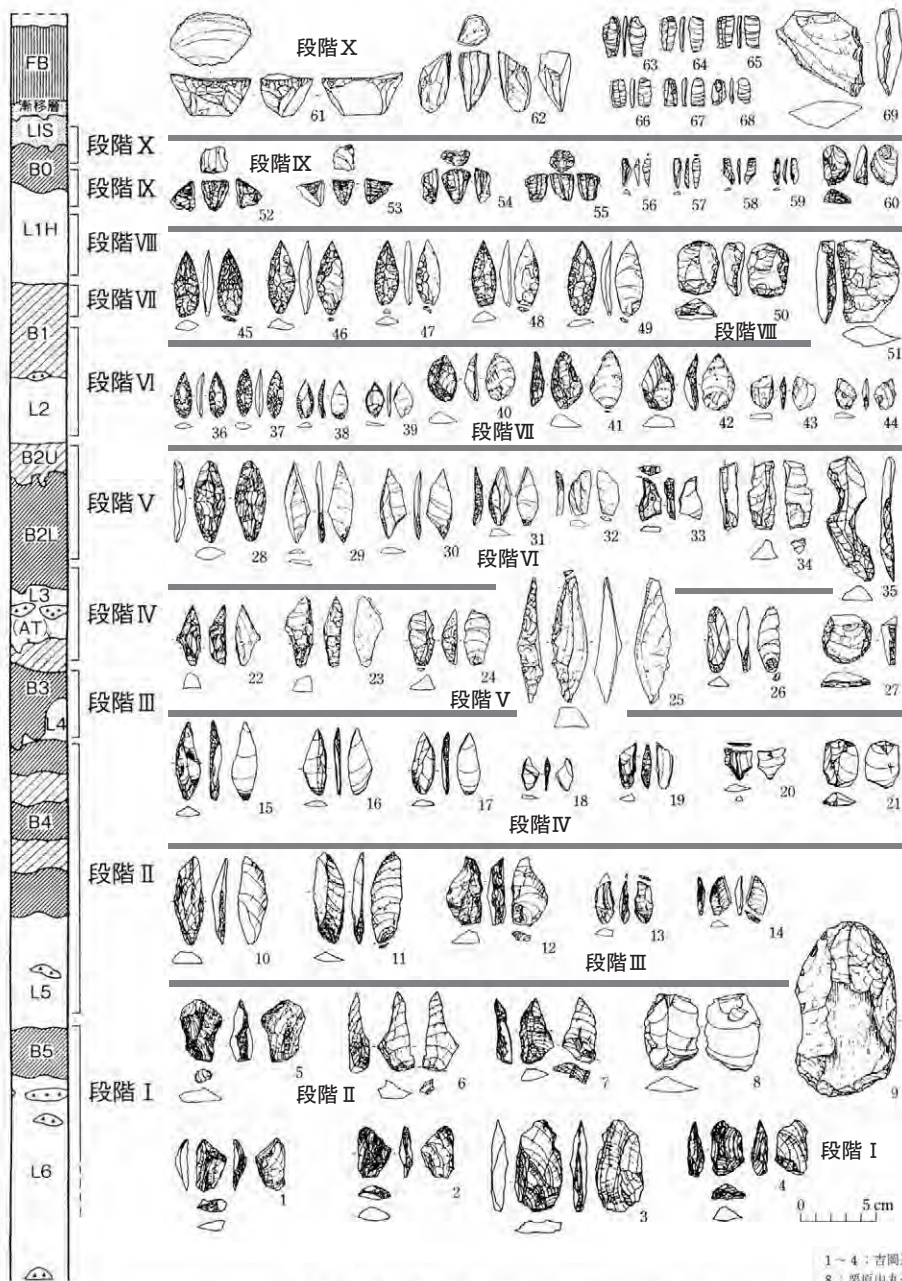


図7 相模野における後期旧石器編年案とおもな石器の消長 (かながわ考古学財団 2000)

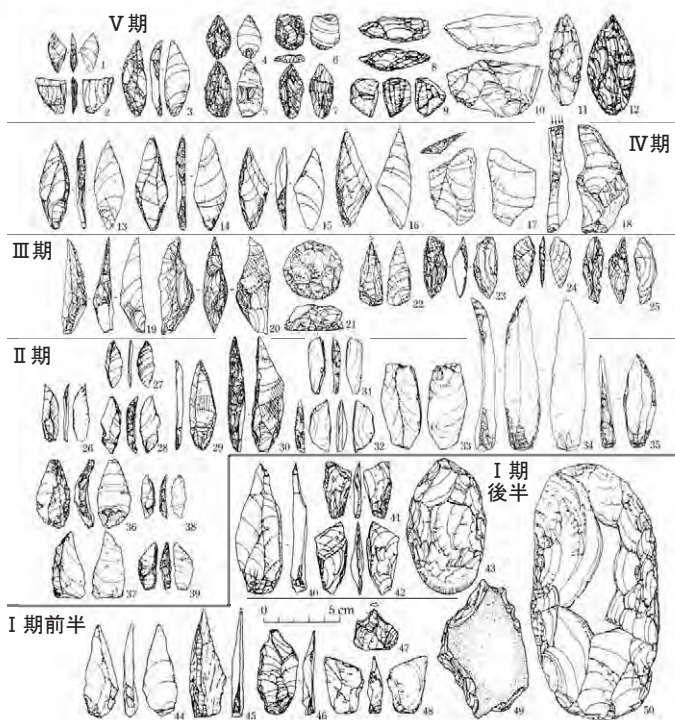
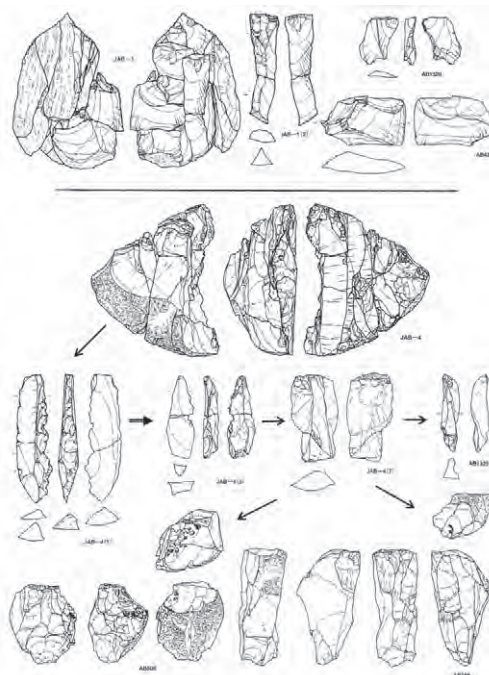
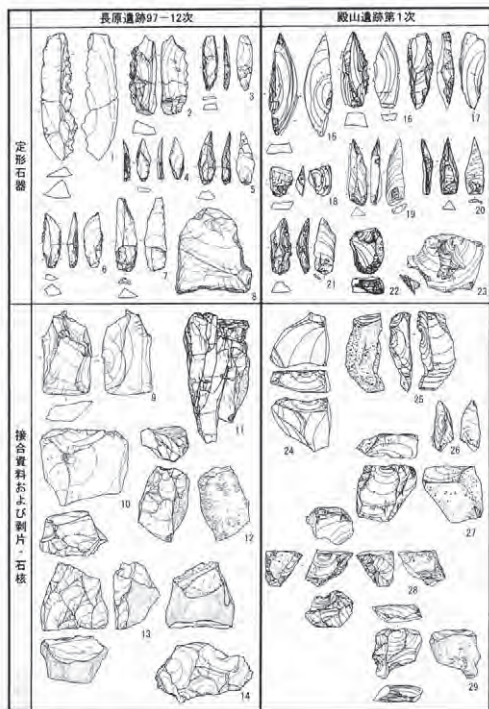


図8 相模野における後期旧石器時代石器群の変遷 (諏訪間・野口・島立 2010 を一部改変)

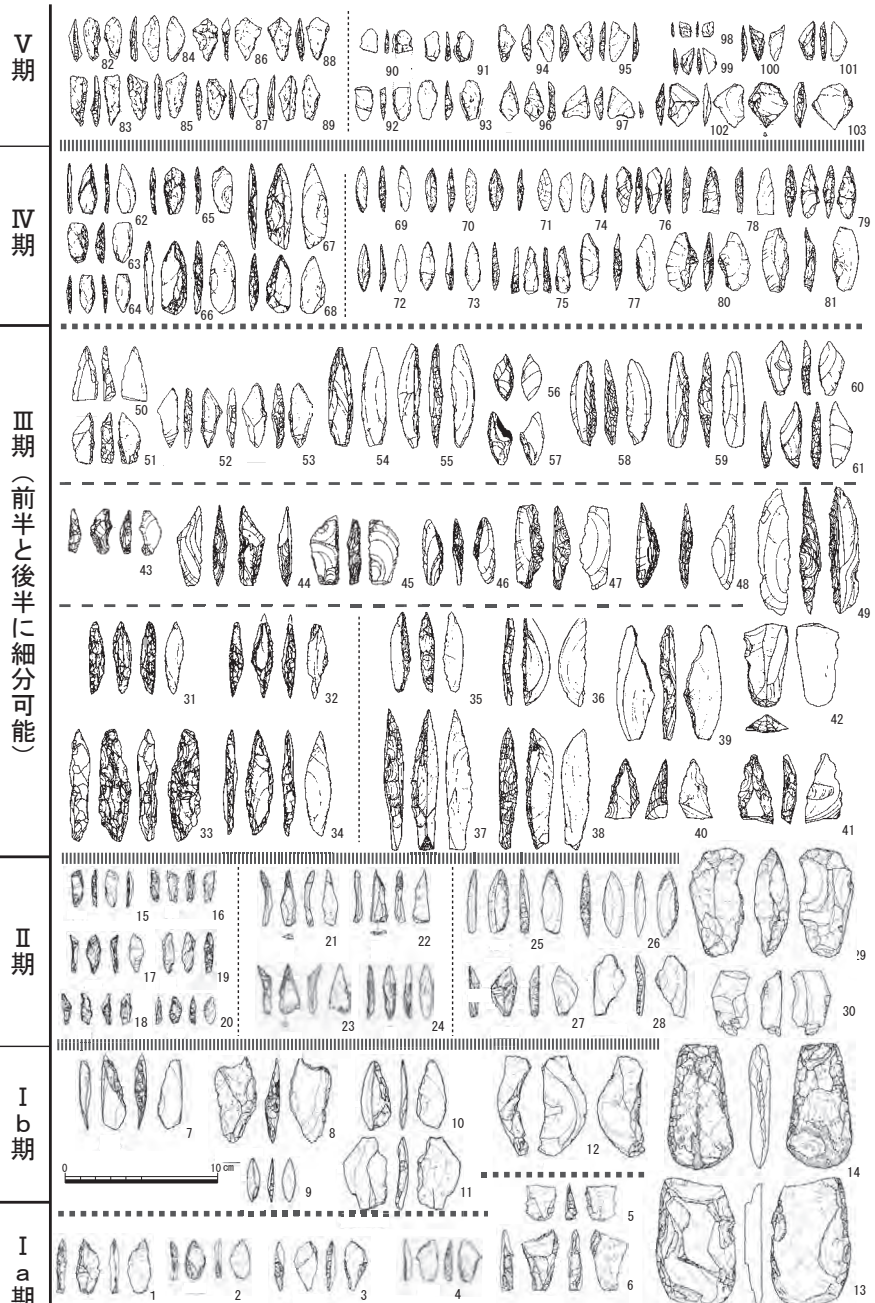
1～4：吉岡遺跡群D区 (B5) 5：吉岡遺跡群D区 (B4下部) 6・7：吉岡遺跡群A区 (B4上部) 8：栗原中丸遺跡第Ⅳ文化層 (L5上部) 9：藤沢市Nc399遺跡第Ⅱ文化層 (B4下部) 10・11：吉岡遺跡群C区 (B3下部) 12～14：上和田城山遺跡4次第Ⅲ文化層 (B3下部) 15～21：寺尾遺跡第Ⅵ文化層 (B3下部) 22～27：柏ヶ谷長ヶ寺遺跡第Ⅳ文化層 (B2L) 28～32：深見諏訪山遺跡第Ⅳ文化層 (B1下部) 33：栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層 (B1中部) 34・35：橋本遺跡第Ⅲ文化層 (B1下部) 36～39：下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層 (B1上部) 40～44：深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層 (B1上部) 45～51：中村遺跡第Ⅲ文化層 (L1H中部) 52・53・56～59：吉岡遺跡群B区 (L1H上部) 54・55・60：月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅲ文化層1群 (B0下部) 61～69：上草野遺跡第1地点第Ⅰ文化層 (B0中部)

図9 武蔵野における後期旧石器時代石器群の変遷 (諏訪間・野口・島立 2010 を一部改変)

1～3：野川遺跡Ⅳ2層 4～7：仙川遺跡Ⅲ層 8：西之台B遺跡Ⅲ中層 12：同Ⅲ上層 9：新橋遺跡Ⅲ層 10・11：鉄山B遺跡 13～18：前原遺跡Ⅳ中1層 19～20：野川遺跡Ⅳ4層 21：新橋遺跡Ⅳ下層 22～25：西之台B遺跡Ⅳ下層 26：同Ⅳ下層 27・28：同Ⅳ層 29～30：鈴木遺跡Ⅵ層 31～33：西之台B遺跡Ⅶ層 34・35：大門遺跡第4文化層 (Ⅶ層) 36～39：嘉留多遺跡Ⅶ層 40・43：鈴木遺跡Ⅳ層 41・42：高井戸東遺跡Ⅳ下層 44・48：多摩川坂遺跡第8地点第1文化層 (Xb層) 45・46・49：高井戸東遺跡Ⅴ層 47：西之台B遺跡Ⅹ層 50：鈴木遺跡Ⅹ層



A
T



1～6・13：七日市第Ⅱ文化層、7～12・14：板井寺ヶ谷下位文化層、15～20：七日市第Ⅲ文化層、21～24：法華寺南、25～30：七日市第Ⅳ文化層、31～34：板井寺ヶ谷上位文化層、35～41：郡家今城C地点、43～49：八尾南3地点、50～53：藤阪宮山、54～57：粟生間谷ブロック6、58～61：南花田、62～68：碓岩南山、69～81：八尾南6地点、82～89：西脇、90～93：大園、94～97：星田布懸、98～103：八尾南2地点

図10 近畿地方における後期旧石器時代の石器群の変遷 (※瓜破北・長原遺跡は別図に掲載している)

図11 (左上) 大阪市長原遺跡 97-12 次調査地の石器群と埼玉県殿山遺の石器群比較 (伊藤 2005)

図12 (左) 日本列島における瀬戸内技法関連資料の分布 (森先 2010)



○ 瀬内系石器群・瀬内系石器群
 ☆ 瀬内系最大の産地 安曇野山脈産地
 ★ 瀬内系からの人の移動を示す瀬内系石器群
 ※ 産地のスケールは1:10、瀬内系産地のスケールは1:5

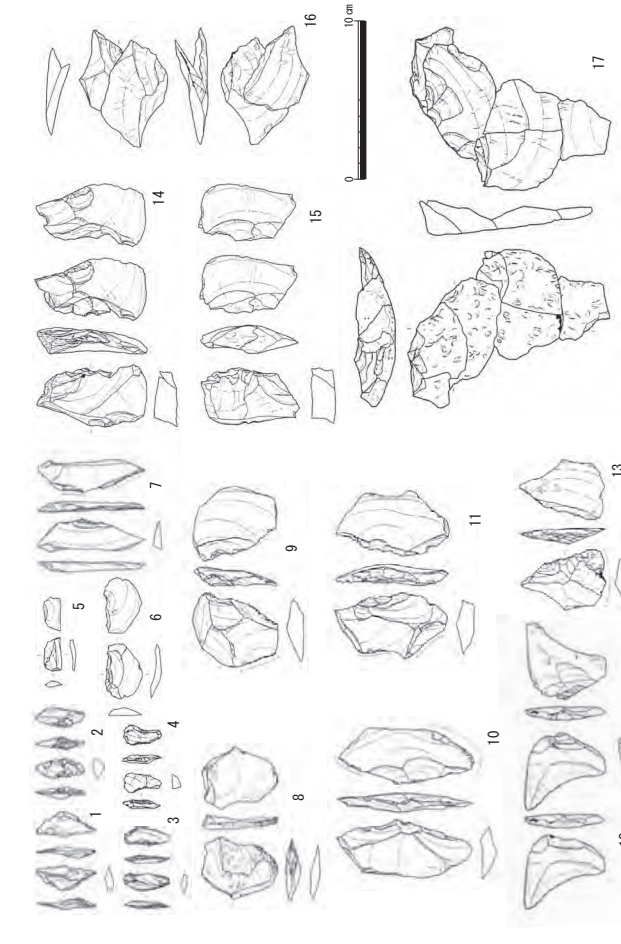


図13 長原遺跡90-62次調査地（I a期：台形様石器）の石器群

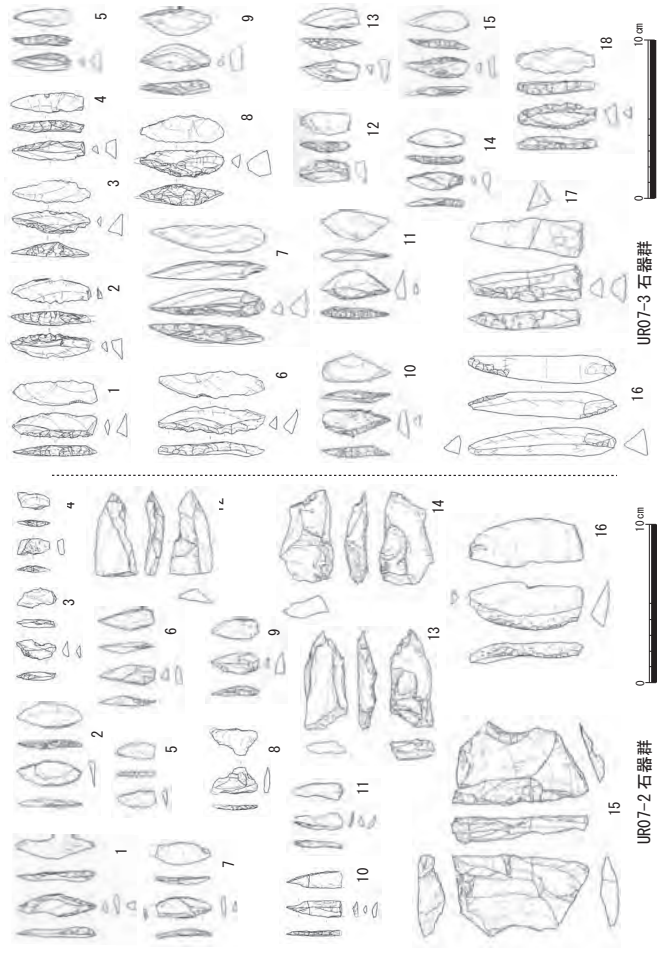


図14 瓜破北遺跡07-2次（II期：石刃技法）
07-3次調査地（III期：瀬戸内技法）の石器群

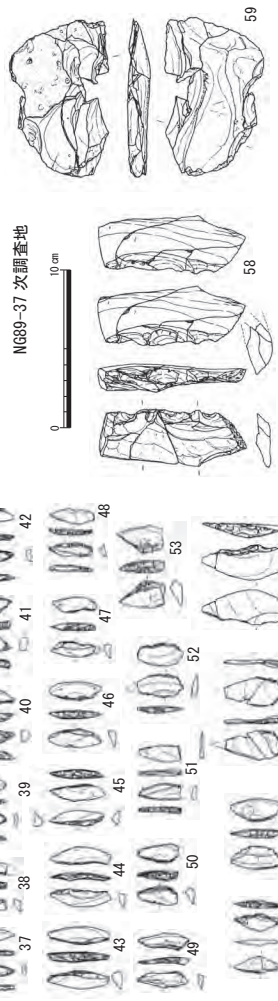
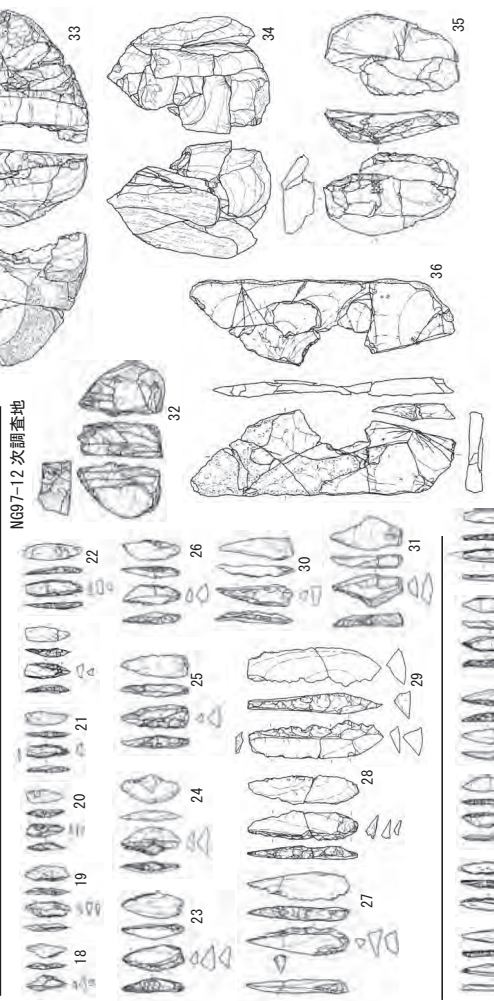


図15 瓜破北遺跡07-3次（III期）・長原遺跡97-12次（III期）
と89-37次調査地（IV期：小形ナイフ形石器）の石器群

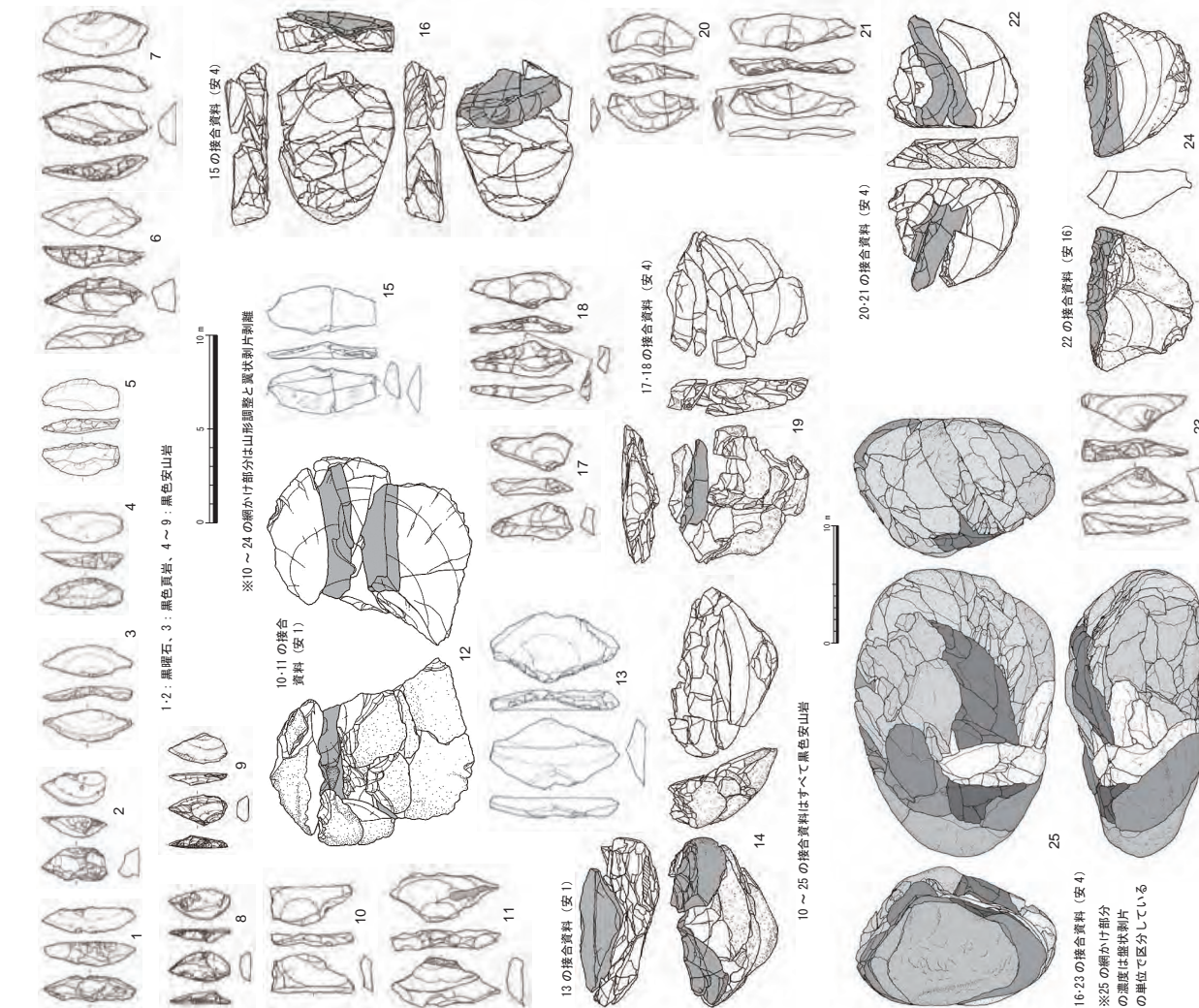


図 17 群馬県上白井西伊熊遺跡の瀬戸内技法

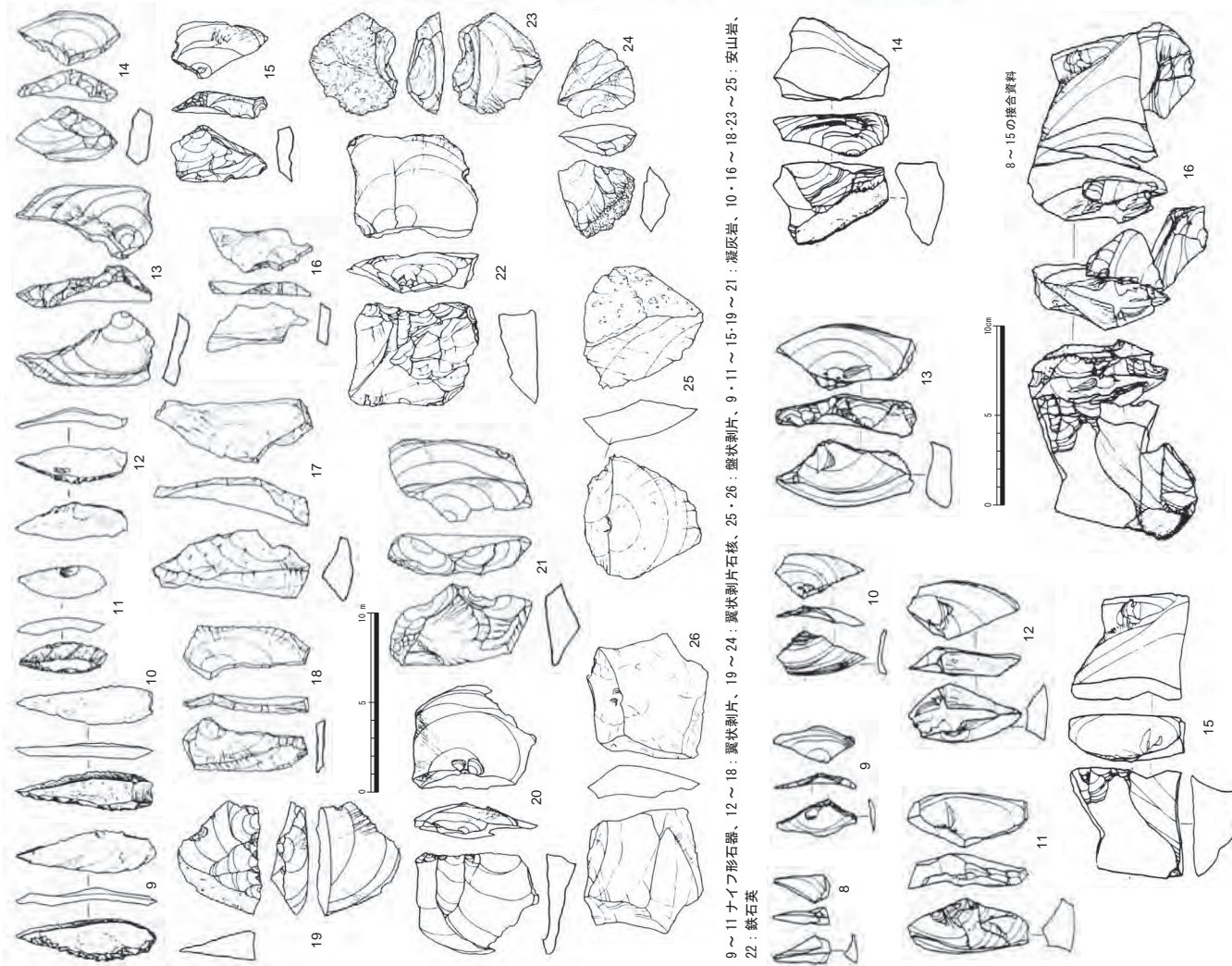


図 16 新潟県御淵上遺跡（上）と山形県越中山遺跡K地点（下）の瀬戸内技法



図 20 東海東部における後期旧石器時代石器群の変遷 (池谷・富樫・麻柄 2010 を一部改変)

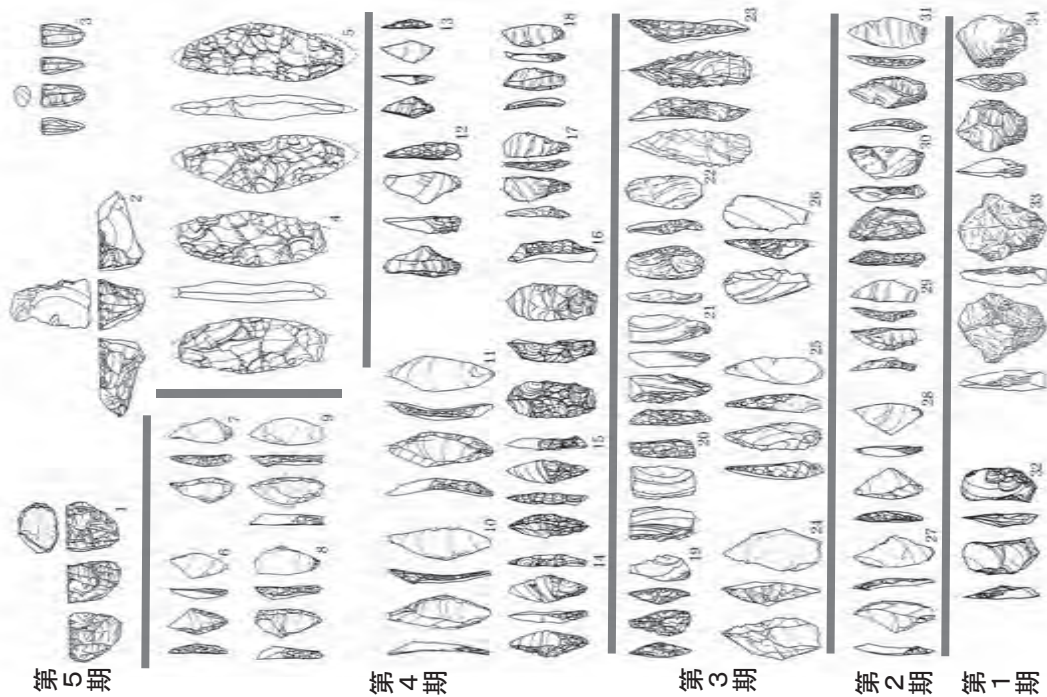


図 19 東海西部における後期旧石器時代石器群の変遷 (池谷・富樫・麻柄 2010 を一部改変)

1 : 駿河小塚 2~4 : 柳沢C 5~12 : 拓南東 13 : 上松沢平 14 : 初音ヶ原遺跡B 15 : 上松沢平 16 : ニツ洞 17 : 上松沢平 18 : 初音ヶ原遺跡B 19 : 広合 20 : 上ノ池 21 : 子ノ神 22 : 西大曲 23~24 : 子ノ神 25 : 寺林 26~29 : 上ノ池 30~31 : 西大曲 32 : 初音ヶ原A 33~35 : 中見代 I 36 : 相薬尾 37 : 中見代 I 38 : 葛原沢IV 39 : 中見代 I 40~42 : 中見代 II 43 : 西洞 44 : 中見代 I 45 : 西洞 46 : 中見代 I 47~48 : 土手上 49~50 : 中見代 I

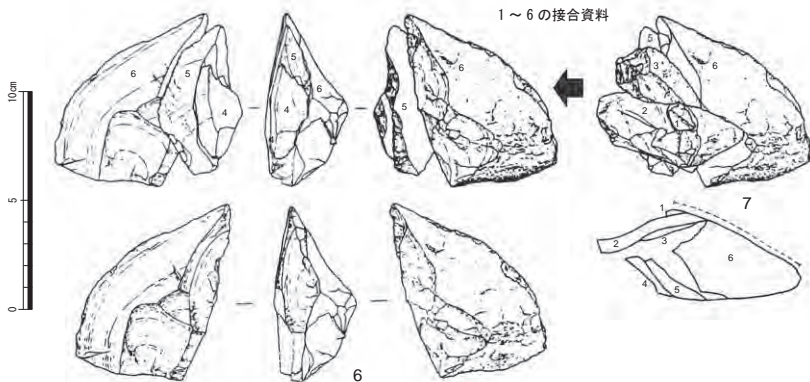
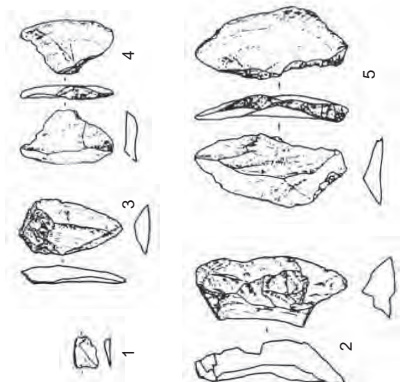
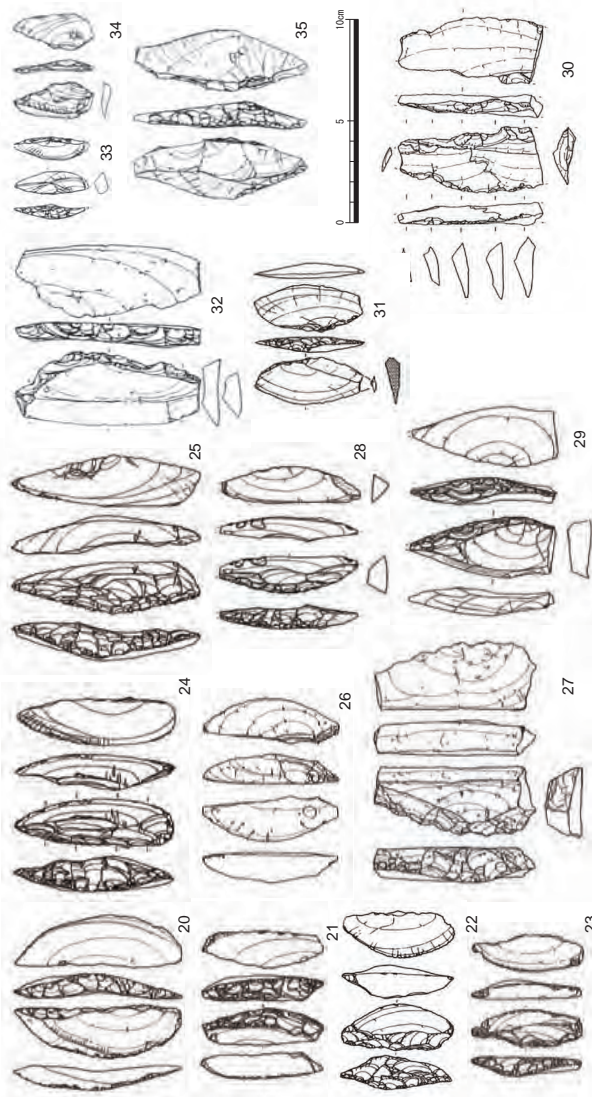
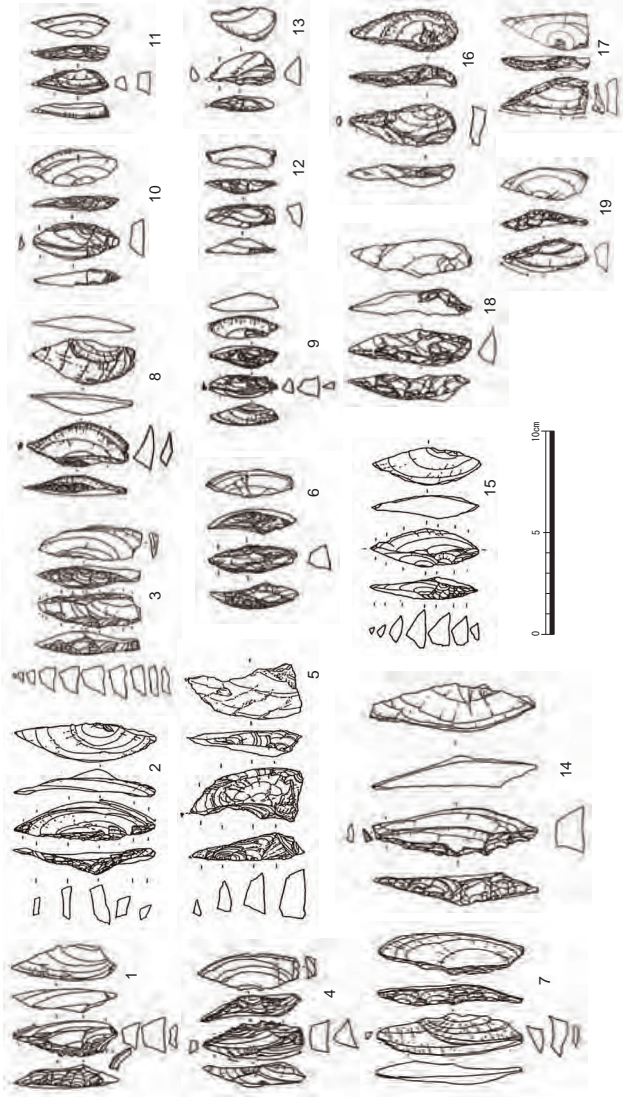


図 18 岐阜県日野遺跡の瀬戸内技法



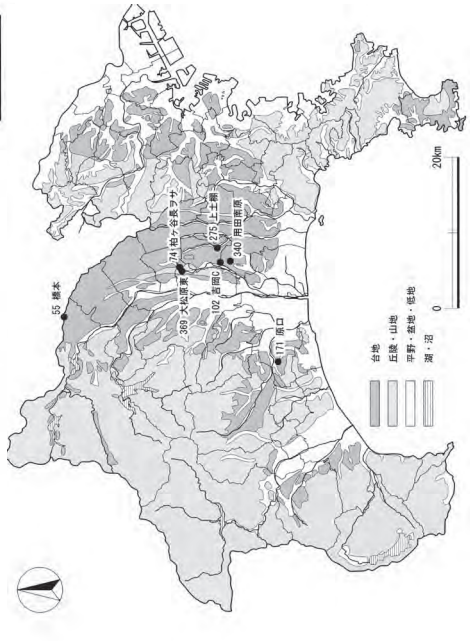
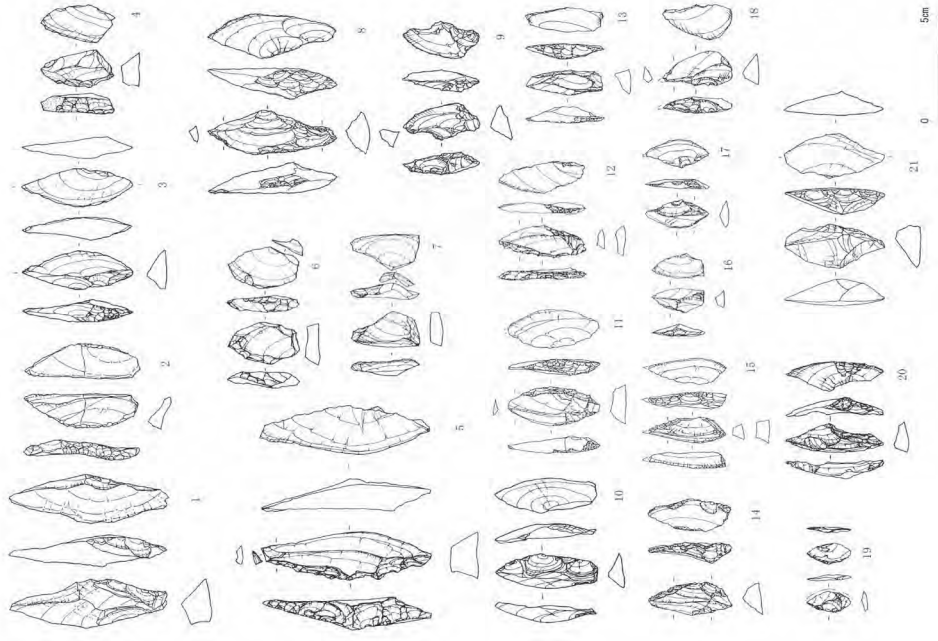
20～23：櫛口遺跡（新潟県）、24・25：坂ノ沢C遺跡（新潟県）、26・27：加用中糸A遺跡（新潟県）、28：大聖寺遺跡（新潟県）、29：正面ヶ原B遺跡（新潟県）、30：芋ノ原遺跡（新潟県）、31：大姫遺跡（新潟県）、32：西下向遺跡（福井県）、33・34：直坂II遺跡（富山県）、35：貴ノ木遺跡（長野県）



1～4：殿山遺跡（埼玉県）、5・6：天沼遺跡（埼玉県）、7：提灯木山遺跡（埼玉県）、8・9：中砂遺跡（埼玉県）、10～13：上土棚遺跡（神奈川県）、14・15：柏ヶ谷長ヲサ遺跡（神奈川県）、16：鈴木遺跡（東京都）、17：富田宮下遺跡（群馬県）、18・19：寺野東遺跡（栃木県）

図21 北陸地方（上）と南関東地方（下）の国府系ナイフ形石器

図22 神奈川県における国府系ナイフ形石器と出土遺跡の分布（かながわ考古学財団 2016）



- 1：橋本遺跡IV文化層（B2U層）、2：橋本遺跡V文化層（B2L～L3層）、3～5：柏ヶ谷長ヲサ遺跡IX文化層（B2L層中～下部）、6：柏ヶ谷長ヲサ遺跡X文化層（B2L層下部）、7：柏ヶ谷長ヲサ遺跡XI文化層（B3L層下部）、8・9：原口遺跡第2文化層（B2層）、10：吉岡遺跡C区B2文化層、11：上土棚遺跡IV文化層（B2L層上部）、12～19：上土棚遺跡Ⅲ文化層（B2U層）、20：用田南原遺跡第VI文化層（B2U～B2L上部）、21：大松原東遺跡（B2M層）

引用・参考文献

- 稲田孝司 1988 『古代史復元 1 - 旧石器人の生活と集団』、講談社
- 稲田孝司 2001 『先史日本を 復元する 1 - 遊動する旧石器人』、岩波書店
- 稲田孝司・佐藤宏之編 2010 『講座日本の考古学 - 旧石器時代(上)』(諏訪間順・島立柱・野口淳、池谷信之・富樫孝志・麻柄一志、佐藤良二・絹川一徳論文所収)、青木書店
- 岩宿博物館編 2011 『岩宿時代 : 岩宿博物館常設展示解説図録』
- 岩宿博物館編 2011 『岩宿時代の東西交流 - 瀬戸内技法と上白井西伊熊遺跡』(第 52 回企画展図録)
- 織笠昭 1987 「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市研究』13、大和市
- 織笠昭 1987 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号、日本考古学会
- 織笠昭 1987 「国府型ナイフ形石器の形態と技術」『古代文化』第 39 巻 10・12 号、古代学協会
- 檀原考古学研究所編 1979 『二上山・桜ヶ丘遺跡 - 第 1 地点の発掘調査報告 - 』、奈良明新社
- 鎌木義昌 1960 「先縄文文化の変遷」『図説世界文化史体系 20 - 日本 1 - 』、角川書店
- 亀井節夫・秋山雅彦編 1987 『カラーシリーズ日本の自然』第 1 巻、平凡社
- 旧石器時代研究プロジェクト 2000 「旧石器時代後半における石器群の諸問題 - 新たなる相模野編年構築にむけて - 』『研究紀要 - かながわの考古学』5、財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器時代研究プロジェクト 2016 「神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相」『かながわ考古学財団研究紀要』21、公益財団法人かながわ考古学財団
- 旧石器文化談話会編 2007 『旧石器考古学辞典』、学生社
- 絹川一徳 2013 「瀬戸内技法の成立と展開」『九州旧石器』第 17 号、九州旧石器研究会
- 小菅将夫 1999 「地域性の出現とナイフ形石器文化」『岩宿発掘 50 年の成果と今後の展望』、笠懸町教育委員会
- 小菅将夫 2006 『赤城山麓の三万年前のムラ 下触牛伏遺跡 (シリーズ「遺跡を学ぶ」)』、新泉社
- 佐藤宏之・山田哲・出穂雅実 2011 「旧石器時代の狩猟と動物資源」『野と原の環境史』シリーズ日本列島の三万五千年 - 人と自然の環境史第 2 巻、文一総合出版、pp.41-50
- 佐藤良二 2007 「サヌカイト」『季刊考古学』第 99 号、雄山閣出版、pp.22-25
- 佐藤良二編 2004 『鶴峯荘第 1 地点遺跡 - 二上山北麓におけるサヌカイト採掘址の調査 - 』香芝市文化財調査報告書第 5 集
- 島五郎・山内清男・鎌木義昌 1957 「河内国府遺跡調査略報」『日本考古学協会第 20 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会
- 白石浩之 2002 『旧石器時代の社会と文化』(日本史リブレット 1)、山川出版社
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』第 3 巻、有斐閣
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について - 層土的出土例の検討による石器群の段階的把握 - 』『神奈川考古』第 24 号、神奈川考古同人会、pp.1-30
- 高橋啓一 2011 「最終氷期の環日本海地域における大型哺乳類動物相の変遷」『野と原の環境史』シリーズ日本列島の三万五千年 - 人と自然の環境史第 2 巻、文一総合出版、pp.41-50
- 辻葩学・高橋章司編 2001 『翠鳥園遺跡発掘調査報告書 - 旧石器編』、羽曳野市教育委員会
- 殿山シンポジウム実行委員会編 2005 『上尾市殿山遺跡シンポジウム - 石器が語る 2 万年 : 県指定文化財 - 』(埼玉考古別冊 8 : 伊藤栄二論文所収)、埼玉考古学会
- 那須孝悌 1985 「先土器時代の環境」『岩波講座日本考古学 (人間と環境)』第 2 巻、岩波書店
- 成瀬敏郎・八島邦夫ほか 2004 「瀬戸内地域」『日本の地形 6 - 近畿・中国・四国』、東京大学出版会、pp.208-241
- 野口淳 2009 『武蔵野に残る旧石器人の足跡・砂川遺跡 (シリーズ「遺跡を学ぶ」)』、新泉社
- 春成秀爾・小野昭・小田静夫編 『図解・日本の人類遺跡』日本第四紀学会、東京大学出版会
- マイク・モーウッド、ペニー・ヴァン・オオステルチ(馬場悠男監訳・仲村明子訳) 2008 『ホモ・フロレシエンシス-1 万 2000 年前に消えた人類』、NHK 出版
- 松藤和人 2007 「瀬戸内技法」『旧石器考古学辞典 < 三訂版 >』旧石器文化談話会編、学生社、p.109
- 松藤和人 1986 「旧石器時代人の文化」『日本の古代 - 縄文・弥生の生活』第 4 巻、中央公論社
- 松藤和人 1979 「ふたたび“瀬戸内技法”について」『二上山・桜ヶ丘遺跡 - 第 1 地点の発掘調査報告 - 』、檀原考古学研究所、奈良明新社
- 松藤和人 1974 「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ - 二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告 - 』同志社大学旧石器文化談話会編、学生社、pp.138-163 頁
- 森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』、六一書房
- 山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地」『関西大学考古学等資料室紀要』第 8 号、pp.12~14
(発掘調査報告書のうち、レジュメ図版に出土資料のみを掲載したものは割愛しています)